

P.E.N.

Japan P.E.N. Club 2017.5 Vol. 443

＜定時総会通知書・委任状の
ご返信について＞

第61回日本ペンクラブ定時総会「出欠席
通知書・委任状」はご送付いただきましたか。

(詳しくは24ページ参照)



(左より) 高橋千鶴、ドリアン助川、志茂田景樹、浅田次郎の各氏

第33回「平和の日」の集い・多摩

「戦争と文学」をテーマに語り合う

まとめⅡ会報委員長・清原康正
写真Ⅱ企画事業委員・杉山晃造

第33回「平和の日」の集い(主催Ⅱ日本ペンクラブ・後援Ⅱ多摩市)は、3月4日(土)18時から東京都多摩市のパルテノン多摩小ホールで開催された。今回からこれまでの4組8名によるリレートークとは趣向を変えて、「戦争と文学」をテーマに、浅田次郎会長の基調講演、浅田会長・志茂田景樹会員・ドリアン助川会員の3氏によるパネルディスカッションが行われた。総会司会は森ミドリ理事(平和・企画事業委員)、パネルディスカッションのコーディネーターは高橋千鶴常務理事。

基調講演に先立ってオープニングセレモニーが行われ、多摩ファミリーシンガーズの合唱と阿部裕行多摩市長のあいさつがなされた。

多摩ファミリーシンガーズは少女16名の編成で、指揮は高山佳子さん、ピアノ演奏は森理事。「夕焼け小焼け」「こきりこ」と森理事作曲の「おやすみなさい、こどもたち」の3曲が披露され、少女たちの美しい澄んだ歌声に250名の聴衆は魅了された。

■阿部裕行多摩市長あいさつ

「私は日本ペンクラブの『平和の日』の集いを多摩市で開催するいくつかのポイントがあると思っています。多摩川と多摩丘陵に挟まれた多摩市の人口は14万8千人近くで、今年で市政施行46年を迎えます。

多摩市と稲城市の間に在日米軍の基地では唯一の多摩レクリエーション施設があります。戦前、ここには大日本帝国陸軍の工廠があり、かつての多摩村からも多くの人たちが働いていました。浅田会長は『日輪の遺産』という小説を書かれています。その舞台がこの工廠なのです。多摩市では平和展を毎年やっていて、この工廠を含めた展示を行うなどの活動をしておりま

す。そして、もう一つ、多摩市は非核平和都市宣言を持つということです。私が市長になって非核平和都市宣言を平成23年11月に行いました。3・11の東日本大震災があり、福島で原子力発電所の事故が



阿部裕行氏

ありました。二度とこういう事故は起こさない、そして原発そのものをなくさなければならぬ。私は原発の再稼働に反対です。そういう立場で市民の皆さんと一緒にこの宣言を作りました。脱原発を明確に打ち出している宣言は、おそらく多摩市だけではないかと思っています」

このあと、「戦争がなく、放射能被害のない、平和な世界に向けてみんなが笑顔で多様な生命がにぎわう町を多摩市から実現していきます」との非核平和都市宣言の全文が読み上げられた。

■基調講演「戦争と文学」 浅田次郎氏

私はこのご近所の日野市民で、多摩動物園のちよつと先ぐらいの所に住んでおります。母親が青梅の先の御嶽山という山の上の出身で、父親は東京下町の深川の出身なのですが、その中間地点の

辺りに住んでいるということなんです。

私が生まれたのは昭和26年（1951年）ですから、戦争は全く知りません。戦後も70年余で、戦争をはっきりと記憶している方がだんだん減ってきて、戦争を知らない世代が多くなり、この数年、世の中が少し変な感じになってきたな、と強く感じるようになってきました。

昭和26年生まれというのは、実は戦争を知らないどころか、戦争の遺物とかそういうものもほとんど知らないんです。私が物心ついた昭和30年の時点で、東京には何もそういう気配がありませんでしたからね。現在と比べてみても高層ビルが増えたくらいのもので、基本的には復興が出来上がっていたという気がします。その頃は青梅街道沿いに住んでいたのですが、街道沿いの中野に焼け焦げた壁のある映画館が一つだけあったというのが唯一の記憶です。ほかには国民服を着ていた人がいたのをうつすら覚えています。

そして、私は昭和46年に自衛隊に入りました。その理由というのは、私は中学生の頃から小説家になりたくて、当時の小説家のエースといえば三島由紀夫で、大変尊敬しておりました。その三島由紀夫が昭和45年11月25日に突然、市ヶ谷の自衛隊駐屯地で割腹自決をしてしまった。それは信じられないことでした。あんなに美しい文章を書く人がどうして切腹して死ぬのだろう、と私は全く理解できませんでした。私は17歳の時に一度、三

島さんに会ったことがあるんです。最晩年の三島さんです。そういう記憶もあつて、大変な衝撃を受けました。それで、三島さんがクーデターを起こそうとして、結局は割腹した自衛隊に行つてみなければ、という大変短絡的な動機だったんですよ。思想的なものは何もなく、文学的な動機で自衛隊に入ったわけです。

私はその時、こんな大事件だったんだから、多分、日本中の文学少年が自衛隊に入隊すると思つていたのです。ところが世の中には、それほど真剣に考えている子どもはいなかったんですね。行つてみたら、どうも私だけみたいで、そういう動機は口に出せずにそのまま入隊したということなんです。

軍隊というのは、まあ軍隊としましょう、自衛隊は事実上の軍隊でありますから、軍隊というのは面白いもので、最初から面白いと思う人と絶対ダメな人があるんですよ。入った途端から辞めようとしている者もいます。でも、契約しているから最低2年間は辞められません。ところが、入った時から生き生きとして面白くて仕方ないという者もいるんですね。私は後者でした。私はひ弱な文学少年ではなかったんです。世にも珍しい体育会系文学少年というのか、体も丈夫でしたし、スポーツも武道も好きでした。

昔の兵隊さんは大変だったろうと思いましたがね。兵役法がある限り、男子は20歳になったら徴



浅田次郎氏

兵検査を受けて、その時の事情にもよりますが、ある程度の人数が入営する。戦時中だったら全部入営することなんです。結局のところは否も応もなく軍隊に入らなければならぬ。これは随分無体な話だと思いました。志願して入った者でも相当数がその場で辞めなくなるわけですね、こんなはずじゃなかったと言って。

そういうところに何年かいて、辞めた理由というのは、このままだとずっとここにいたいと思ったからなんです。私は物事をあまり深く考えないんです。まっすぐに考えるほうなので、だったら小説家の道はどうなるんだと思ったので、自衛隊を辞めたんです。すぐにも小説家になれると思っていたのですが、そんなに甘くはありませんでした。自衛隊にいればよかったなあと思う日々をずっと悶々と過ごしながら、作家デビューしたのは40歳

でした。

最初は何を書いても全く認めてもらえず、活字にならなかった。おかしいなと思いながら、40の声を聞く直前のところで本が出たのですが、最初の頃はヤクザ物の、しかもコミカルな小説を書く「お笑い極道作家」と言われてました。直木賞は『鉄道員（ぽっぽや）』というわりと真面目な小説で受賞したのですが、その時に、あるスポーツ新聞が大きな見出しで「極道作家に直木賞」と出したんですよ。この新聞社はいまだに忘れませんけれど、以降、仕事は一切受けておりません。

でも、その頃に転機を与えてくれたのがある小さな出版社で、「あなたはヤクザ小説を書いてくれるけれども、それだけではないでしょう。自分で好きなものを書いてください。本にしますから」と言われたんですよ。うれしかったですね。その時に書いたのが先ほど話に出た『日輪の遺産』です。全く無名の頃に書いた作品です。私はその頃、稲城市に住んでいました。米軍の施設があつて、クリスマスにはきれいなイルミネーションがついたんです。現在では日本のそこら中にありますが、それ以前に米軍の施設にはイルミネーションがついていて、きれいだなと思いつつ、この小説を書きました。中に書いてあることは作り話です。その頃から私は、戦争を知らない世代ではあるけれども、やはり戦争をテーマにした小説を一生をかけて書き続けなければならないのだろうな、

と思いました。自分の経歴を考えても、それが書けるはずだとも。

それからもう一つの大きい理由は、私は小説を書くのが好きですけれども、小説を読むのはもっと好きです。読むのがすごく好きなので、自分で書き始めたわけですからね。本を読む時は何も考えず、虚心坦懐に一読者として読んでいます。読書はずっと続けてきた途中で、戦争文学というものについて考えたことがあるんです。戦争をテーマにした文学は、もちろん世界中にあります。ただし、一番多いのは日本だと思います。

でも、戦争を小説にしたら売れないんですよ。これは世界中そうなんです。物語を読む時って、誰でもその中に夢を求めたい、楽しく読みたいですよ。戦争を舞台にしたら、やはり悲惨な話になるので、それは娯楽としてはあまり好ましくない。そこから学び取ることがどのくらいあるか、戦争自体が壮大な負の行為ですから、果たして現代人の生活に戦争文学を読むことによってたになることがあるかと言うと、それも疑わしい。そういうわけで、戦争小説というのは売れないんです。

その売れない小説がなぜ日本ではたくさん書かれているかと言うと、まず小説自体の絶対量の違いがあります。日本は明治期以来大変な出版大国です。国の大きさとか経済規模とか国民の数とかを考えたら、出版大国と言い切ってもいいでしょ

うね。おそらく今でも出版点数は世界一だと思えます。これは国民の識字率が昔から非常に高くて、本を楽しむことができるからなんです。供給する側の小説家の数も絶対的に多く、いろんな体験をした人がいるから戦争文学も多くなります。

日本の戦争文学の起源を私なりに辿ってみました。明治時代に日本の文学が言文一致になって口語体で書くようになった時に、たくさんの文学者がヨーロッパに留学して、小説のパターンの流行というものを日本に持ち帰ってきました。夏目漱石はイギリスから、森鴎外はドイツからというふうに。ですから、明治時代の文学はヨーロッパ文学の影響を非常に強く受けているわけですが、その頃のヨーロッパ文学の主流は自然主義文学でした。自然主義とは、人間の営みがあるがままに書くということです。私の考えでは、この自然主義というのを日本は誤解して受け取ったところがあったと思います。

おそらくヨーロッパで言う自然主義とは、キリスト教の宗教的な束縛から離れて人間本来の姿を描こうという運動であったと思います。ところが日本はもともと宗教的束縛が全くない国で、あるとしたら礼儀とかそういう意味での儒教的束縛でしょうね。そのほかの仏教や神道、キリスト教が生活を束縛しているということはないですね。ヨーロッパのキリスト教に対する自然主義というものを日本が持ち帰ってきた時に、そういう宗教的

なことは分らないから、ともかく人間をありのままに書くということになったのだと思います。ありのままに書くと言うと、自分の女弟子が座っていた座布団を撫でたりする場面を書くわけですよ。人間の煩悩をそのまま書いてしまう。これはありありと自然主義ですね。この書き方というのは今日までずっとつながっていて、いわゆる純文学の私小説の系譜として現代も日本文学の主流になっていると言っていると思います。

ところが、このことと戦争文学とは関係がある、と思ったんですよ。戦争は、国民皆兵である限り、ほとんどの男子が軍隊に、女子も勤労動員に行かなければならない。しかもそこで、大変な苦勞をするわけです。その苦勞をそのまま書くかと思っただのではないかと。だから、日本の戦争文学は極めて人間的なんです。ただし、昭和に入ってからは大変な検閲を受けることになり、ここがダメ、あそこもダメということになる。それでも上手な書き手は、その隙間をすり抜けて一見して軍隊を賛美しているように見えるんだけど、読む人が読めばこれは反戦文学だという作品をたくさん残すんですね。

私が記憶しているものの中では、日比野士朗さんの『呉淞クリーク』という短編があります。上海陸戦の時の話なんです。戦場の様子を活写した戦場ドキュメントです。これを戦時中に書いたんですね。ハリウッド映画を見るようなすぐれ

た描写をしている。そんなに残酷なことは書いていないので、軍部としてもこの検閲はオーケーで、しかも日本の兵隊さんはこんなにがんばっているということを活写したと、この小説を拍手で送り出したわけですね。

ところが、今日読んでみると、これはすごい反戦小説なんです。自分の中隊長、上官、分隊長のことや戦友たちのことを書いたり、彼らが死んでいく、傷ついていく、という話を書いているのですが、必ず次のようなことを書くんですね。「主人公は徴兵される前は小学校の教員をしていて、福岡県のどこで教鞭を採っていた」とさりげなく書いています。それが全部の登場人物にわたって書いてある。これは後世の者が読めば大変に興味のあることでした。日本の戦争文学は、いろいろな検閲を受けながらも生き続けてきたことが分かります。

日比野さんがこれを書いて何十年も経ってから戦争を知らない私が読んだわけですが、戦争と軍隊の実態というものがよく分かりました。戦後に生まれて育った私たち世代は、どうしても軍人が悪で、庶民が善で犠牲者、というふうな線引きをしてしまいます。ところが兵役法というものがある限りは、戦場に倒れた兵隊はほぼ全員が職業を持っているんですよ。学生であったり、サラリーマンであったり、市電の運転手であったり、魚屋さんであったり、八百屋さんであったりする。そ

ういう人たちが召集令状で戦場に送り出されて戦うわけです。これが戦争の実態というものと、私はこの小説から教えてもらいました。

この小説はなかなか手に入りませんが、3年前に集英社で刊行した『戦争×文学』という全20巻の文学全集の中に収録されています。私はその編集委員の一人だったのですが、たくさん埋もれた作品の中から掘り起こして、社会的に意味のある、文学的にも貴重な作品をまとめています。いい小説ばかり入っているので、学校や公立の図書館にはほとんどあると思いますので、お読みになつて下さい。

戦争文学と言うと、火野葦平さんのことが思い出されます。戦時中に芥川賞を受賞するのですが、その時に中国大陆の戦場において、陸軍伍長でした。芥川賞に決まって、評論家の小林秀雄さんが受賞の銀時計と賞状を持って軍隊まで行ったというドラマチックなスタートを切った小説家でした。ところが、これが軍部に利用されてしまいました。それから後は、戦争を賛美するような、軍隊を賛美するような小説を書き続けたことを、本人は非常に悔いて、とうとう戦後に自殺なさっています。そういう悲劇的な文学者もいたということです。

火野葦平さんもおそらくは日本ペンクラブの会員であったと思いますが、日本ペンクラブは国際ペンのブランチとして昭和10年11月からずっと82年続いているんですね。初代会長は島崎藤村さん

で、戦時中にはさまざまな弾圧を受けてほとんど活動ができなくなったのですが、それでもずっと存続し続けてきたんですね、今日まで。

国際ペンはどういうきっかけで始まったかと言うと、第一次世界大戦が終わった時にヨーロッパで、戦争の原因は文化にもあるのではないかと、報道の自由や言論・表現の自由が制約された時に戦争が始まってしまっているのではないかと、ヨーロッパの文学者たちが団結して1921年（大正10年）10月に設立されました。現在でもロンドンに本部があります。

ですから、日本ペンクラブという名称から小説家のサロンみたいなイメージを抱いている方がいらっしゃるかも知れませんが、決してそういうことではなくて、言論・表現の自由を守る、そして戦争に反対する文筆家の団体です。そのようにして今日までできておりますので、3月の雛祭りの日の前後に日本のどこかで「平和の日」の集いをやろうということになっております。

確かに戦争文学は商業的に言えば全くダメなんです。私もずっと書き続けておりますけれども、部数から言ったら、やはり時代小説やお笑い小説に比べたら、ガクッと落ちます。でも、これは社会的にも書き続けなければならないと思いますし、もう一つは、われわれの文学の先人たちが築いてくれた、世界でも稀な戦争文学の伝統を引き継いでいかなければならないと思っています。

戦争では大勢の人が死にます。日本はこの70年余り、戦争をしませんでした。地球上の国の中で、70年余にわたって一発も銃弾を撃たなかった軍隊と国はおそらく世界中にもないんじゃないかな。戦争をしなかったのは大変に誇らしいことであって、いかなる経済大国であるよりも、教育大国であるよりも、もっとも誇るべき、日本が誇るべきことであると思います。

今、憲法の問題がいろいろありましてね。自衛隊の問題もありますから、その整合性から言って、憲法は多少は変えなければいけないという気はしますけれども、それでももし変えるとしたら、第一条には今の第九条をもってきてほしいと思います。やはり戦争の放棄、交戦権の否認というのは、どこにもない素晴らしい憲法なんです。だからこれを脅かすような動きには国民こそって反対するのが、偉大なる文化国家というものではないでしょうか。（拍手）

■ パネルディスカッション 「戦争と文学」

パネラー 浅田次郎氏・志茂田景樹氏・

ドリアン助川氏

コーディネーター 高橋千劔破常務理事

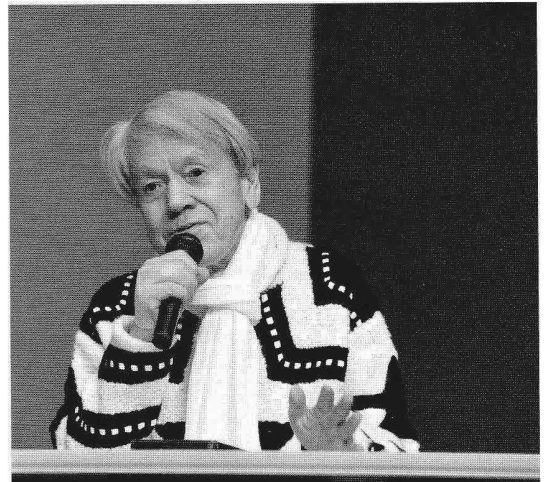
高橋 文学にとって戦争は永遠のテーマであります。トルストイの『戦争と平和』を例に挙げるま

でもなく、古今東西、戦争を背景とした膨大な戦争文学が書かれてきました。パネラーの皆さんはそうした戦争文学の読み手であると同時に実作者でもあり、いろんな問題を含めて語っていただくわけですが、少年時代にわずかながらも戦争を体験している志茂田景樹さんからお願いいたします。

志茂田 僕は現在76歳、もうすぐ77歳になります。昭和20年8月15日は満5歳でした。その前年、満4歳あたりの頃からは戦争に關係する記憶ばかりです。子どもではありましたが、戦争の匂いとか雰囲気を感じることができたのかなと思います。7、8、9歳の少国民と言われた世代よりも、もしかしたら戦争を冷めた目で見ていたんじゃないかなという気がします。

僕は当時、東京都下の小金井町、現・小金井市に住んでいました。父が国鉄職員だったので、国鉄官舎にいたんですね。官舎から3、4キロ歩けば、軍需工場が散在してました。最大のものは武蔵野市にあった中島飛行機の製作所で、一番多い時には5万人の従業員がいたそうです。

昭和19年11月にその工場をB29が初めて爆撃したんですね。そのあたりから2、3カ月の記憶だと思のですが、庭に防空壕があつて、空襲警報のサイレンが鳴ると、皆がそこへ入る。昼間だと、父が防空壕のフタみたいなドアを開けるんですね。すると、斜め上空に巨大な飛行機が飛んでい



志茂田景樹氏

くのが見えた。B29です。十数機の編隊が過ぎていくと、すぐにまた十数機の編隊が続いていきます。それが防空壕からのぞけるんですね。あれがB29だぞ、と父が教えてくれました。巨大な飛行機の編隊は子ども心にも本当に不気味でした。でも、かつこいいな、とも思いました。ここが実は戦争の残酷なところで、戦争というのはどこか子どもの美意識をくすぐるんですよ。

翌年の3月10日の夜、空襲警報が鳴って防空壕へ向かったのですが、防空壕の中は何か変な匂いがして陰気で、家族は皆、もう防空壕に入りません。庭にいて、東の空がどんどん真っ赤に焦げていくのを随分長いこと見ていました。子どもの視界いっぱいには広がっていくのが大変不気味で、今

でもものすごく恐怖が迫ります。

でも、やはりどこか、あの真っ赤に焦げた東の空には惹かれてしまうところがあるんです。これが戦争の魔力みたいなところなんでしょうけれど、変な美意識があつて、それが戦争はいけないということだと思っています。僕にとつて小さな戦争体験、肌で感じた戦争体験というのは、そういう意味で今でも心の底に染みついています。

高橋 私は終戦の時は2歳でしたので何も覚えておりませんが、浅田さんも終戦の記憶はないわけですね。でも、小説で書きになっています。

浅田 戦争を知らない人間が戦争のことを書くというのは、やはり大変恐ろしいことなんですね。取材もしなければならぬし、人から話も聞いて集めないと分からない。その時、自分としては大変おもしろい感じというか、なんでこんな仕事を自分がするのだろう、申し訳ないという感じというのが、今でもいつもあります。でも、それは自分の仕事として書いていかなければならないし、自分でも書きたいですね。

小説の連載が始まった時つて、ここが間違っている、あそこが違うとか、経験のある方からいろんな投書がくるんですよ。これは大変ありがたいことで、ご意見を後の原稿に反映していくこともできるので、連載が折り返しに入つて佳境になってくると、違う恐怖が生まれてくるんですね。最初のうちはこれで大丈夫だろうか、これで合っ



浅田次郎氏

てるだろうか、また怒られそうな気がする、という恐怖で書いているのですが、後半になってくると、ものを言えない人のことを考えてしまう。後半になると人が死んでいくことになるので、こういうことを書いて、これは生きている人は文句を言うかもしれないけれど、亡くなった人は文句を言えないんだ、という恐怖です。それが責任という恐怖だと思うのですが、それは戦争小説を書くたびに必ずいつも思うことです。

高橋 一番若いドリアンさんは？

ドリアン 私は昭和37年の生まれなので戦争は知らないのですが、開高健さんに憧れた時期があり、中高生の時に『ペトナム戦記』などを読んでいたので、フリーライターになってからカンボジアに行きました。自衛隊がPKOで入るかどうかと揉めていた時です。虐殺の現場を歩いたりしました。私は、激しいパンクバンドで「叫ぶ詩人の会」というものを作ってデビューしたのですが、浅田さんがおっしゃる通り、戦争が絡むと売れないんですね、全く。例えばカッパルで音楽を聞こうという時に、地雷を踏んじゃったお父さんの歌とかは聞きたくないわけですね。それで、こういうことはやめよう、もう食べていけないし、ということとで、2000年に日本を離れて3年近く、ニューヨークのマンハッタンで暮らし始めました。

そこでバンドを組んだのですが、結果、何が起きたかと言うと、9月11日のあのテロ事件を目の前で見てしまった、体験してしまいました。お金がほとんどなくなっていたこともあって、あの日はブルックリンのアパートに引っ越しをする予定でした。2機の飛行機がビルに突っ込んで、ペンタゴンにも突っ込んで、という状況の中での引っ越しで、電話もテレビも回線を切っていて情報が入ってこないわけです。何が起きているか分からない。ただ、ニューヨークの半分が黒煙に包まれている中で、人間というのは、100人いたら100の

反応があるんだということを知りました。

信じられない光景をいくつか見ました。例えば、サラリーマンが腕まくりをして「戦争が始まるぞ」と顔を紅潮させてビールを飲んでいました。映画「風とともに去りぬ」で南北戦争が始まった瞬間に皆が踊り出しますよね、あんな雰囲気がありました。一番信じられなかったのは、普段はタイムズスクエアあたりでワゴンに違法ビデオを山盛りにして売っている人たちが、マフィアですね、この人たちがあの直後に何を売り出したか、と言うことでした。皆さんは想像がつくでしょうか。何を山盛りにして売っていたかと言うと、日本製の「写ルンです」というカメラです。それを思いつくマフィアですごく商才があるなって感じました。どこに在庫があっただろうと思うのですが、売っている連中もすごいし、それを買った連中は罵詈雑言を浴びたりしている。戦争と言っても、そこで生きていく100の姿があるんだということです。

それからもう一つは、その直後に私が初めて感じたのは、あのツインタワーの中にいた全員、犠牲になった人たちが、今後、受け継いでいくであろう生命も消えてしまった、ということです。これから100年後、この人たちが生きていればどれだけの生命が世の中にあっただろうか、それが同時に消えてしまった。ということであれば、3月10日の東京空襲がなければ、今の自分に違う親

友がいたかも知れない、違う恋人がいたかも知れない。戦争によっていくつもの生命が失われる先に、実はさらに透明な見えない生命が失われているのだ、という感覚に苛まれました。そのところをうまく書けないかなと思ひ、『あなたという国』という本を書いたのですが、今もそういう感じを持っています。

高橋 9・11テロ事件の話が出ましたが、皆さんがあの事件で感じたことは？

志茂田 対テロ戦争は戦争じゃない、と僕は思っています。これからの国家対国家、国家群対国家群の戦争は、今まで以上に悲惨なものになります。

世界史の年表を見ると、戦争と平和の繰り返しです。時代が遡るにつれ、その頻度が高くなっているような気がします。どう見ても人類は戦争中毒に陥っているんじゃないかという気がするんです。禁断症状が出てくると、戦争が始まる。人間というのは賢いはずなんです。譲り合えば戦争に至らないと思うんです。

例えば太平洋戦争だって、日本とアメリカがもう少し譲り合えば、日本が中国大陸からの撤兵ぐらい譲れば、交渉はまとまったと思うんです。でも、まとまらなかった。ということは、どこかに戦争中毒、要するに戦争やりたい症候群と言ってもいいものがある。戦争を始める人たちはそういう症候群にかかった人たちではないかなと思いますね。

これからの時代、武器が究極にまで発達した中で戦争が行われるとしたら、人類は滅びる方向に向かっけしてしまいませんか。でも、人類、そんなアホですか。われわれはそんなにアホなんですか。きっとそうじゃない。どこかで理性の部分が平和を求めている、それも永遠の平和を求めている、と思うんですね。

戦争が行われている時代には平和が、平和な時代には戦争が、穴蔵の底に沈んでいるように見える。今は確かに、日本という環境から見ると、戦争は穴蔵の底に沈んでいた状態から少し上がってきているような気がします。そう言えば、この2、3年前からなんだか息苦しくなってきたと感じます。共謀罪なんかの問題もありますけれども、官憲が踏み込んできて「ちよつと来い」なんて言われたら嫌じゃないですか。要するに、自由が少しずつ、蚕が葉っぱを少しずつ食べるように、少しずつ侵食されているような気がします。穴蔵の底から戦争が少し浮き上がってきたな、と。

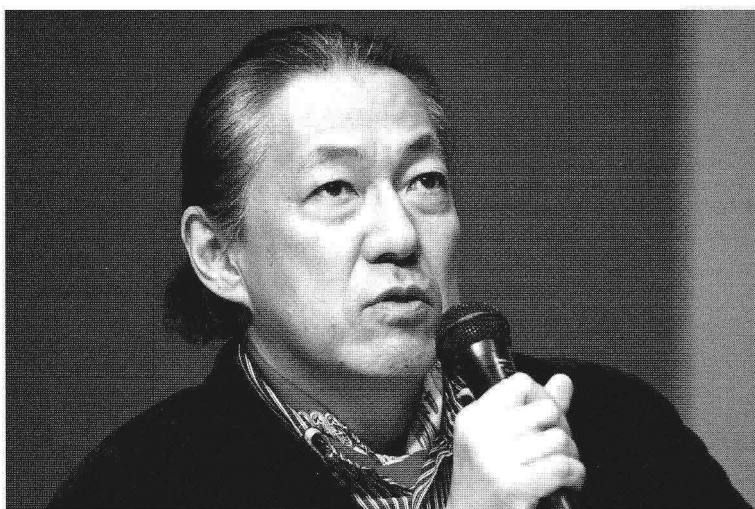
その穴蔵から浮き上がってきた戦争を埋めてしまおう。私たち人類が、本当の心と心、心の底に持っている理性でそれを埋めてしまおう。その埋めるものこそ何かと言え、文学が大きく関わっているんじゃないのかな、と思います。戦争中毒の人類かも知れないけれども、平和な文学によって、心の文学によって癒されていけば、戦争を埋めることができるんじゃないか、と僕は人類未

来への期待を大きく持ちながら、そう思っています。

浅田 私9・11事件の映像を見た時は、まさかと思いました。ああいう事故なのだ、他のことはありえないだろうと思ったのですが、恐ろしいこととあります。

私たちは戦争を戦後70年間ずっと振り返ってきたと思います。近隣の国からは歴史認識が足りないといつも言われるのですけれども、それでもやはり、謙虚に振り返り続けていたと思います。多くの人が、それでも長い時間が経つと、ちよつと形骸化してくる感じ、情緒的なものになってくるんですね。

例えば戦争の実相、神風特攻隊や徴兵制度を類型化するとか、そういう一つの形になって、一つの戦争という情緒的な形になって伝えられてしまふ。これは僕らが気がつかない風化だと思ふんです。だから毎年毎年、夏になるとテレビのドラマでも映画でも戦争ものというのは必ずやるし、ドキュメントもあるのですが、やはり同じパターンに偏ってきているのではないかという気がするんです。戦争を知らない僕らの世代には自分で解釈する仕方が分からないですから、形骸化されたものを踏襲していくわけです。でもね、これはやはり、戦争を忘れたことと同じだと思ふんです。このあたりを今、私たちは現実問題として考えなければいけないのではないかと思います。



ドリアン 助川氏

一つの方法としては、例えば情緒的な戦争というのを僕らの世代で完全に数値化して科学的に分析してみる、という試みですね。私は小説を書く上で、最終的には小説ですからロマンチックに情緒的に書きますけれども、その根幹にあるものは、できるだけ自分でいろいろなものを調べて、それを数値化して、客観化して、もう一度ストーリーに焼き直す、という作業を必ず繰り返しています。例えば、志茂田さんからB 29の話が出ましたが、

B 29というのは4発のプロペラ機で、今のジェット旅客機と同じ1万メートルの高度を飛んで来るんですからね、すごい機密性があるってことです。しかも、その航続距離は5600キロもあり、すごい長距離を1回のカソリンタンクで飛べるわけです。日本爆撃の出撃基地だったマリアナ諸島のサイパン島から日本までの距離は2400キロです。こういう数値化をしてみると、B 29爆撃機が登場した時に日本は丸焼けになるということは、当時の人も分かっていたと思うんですよ。軍部もそのくらいの分析はしていたと思うんだけど、その結果として原爆が投下されたし、東京大空襲で一晩に10万人もの死者が出るなど、一般国民が犠牲になった、というふうな振り返り方ですね。

こういう振り返り方をした上で、もちろん、こういう説明をしたら小説になりませんけれども、これを認識した上で、空襲の形を書くという作業が、やはり戦争を知らない作家たちの義務だと思います。日本人が数字に弱いせいで、数値化できないということもあります。数値化できないところを情緒で埋め合わせようとする。戦争自体がそうでした。

だから原発の問題にしても、原発に賛成か反対かという議論ではなく、この小さな国になぜ54基もの原発があるのか、といった数字を考えてみると、これはおかしいんですよ。つまり、電力を生み出すのではなくて、他の理由によって54基も造

られていることなんです。これを分析しないと、脱原発の本当の根っこはつかめないという気がします。

ドリアン 戦争は国と国というのが従来の形だったのが、9・11のテロ事件以降、世の中は完全に変わったな、新しい戦争の時代が始まったのではないか、と思っています。

例えば、イスラム教とキリスト教のエンドレスの戦いを僕が感じたのは、ニューヨークにいた時にチュニジア人の留学生から「そろそろアメリカは油断しているぞ。やり返せ」と言われた時でした。何を言われたのか分からなかったですね。彼は「広島と長崎への原爆は、どう考えても人類最大の罪である。そろそろアメリカは油断しているから、日本はやり返していい時期だ」と言った。「とんでもない。そんな考え方、俺たちにはない」と言ったら、「それは信じられない。われわれの宗教では、仕返しをするというのは何百年後でもいいんだ」と彼はとうとうと語ったのですが、その時に、これはすごい時代が始まったなと思ったんです。散発的なテロによる犠牲者の数は戦争に比べると少ないですが、それが終わらない時代が来てしまったのではないか、テロによって国家と国家が巻き込まれていくこともあるのではないか、と不安な気持ちになりました。

私はできれば武器は持ちたくない、ときれいごとかも知れませんが思っていたので、あの後、イ

ラク戦争に向かって行くアメリカに滞在していて、ビンラディンを捕まえるためにアフガンにアメリカ軍が行った時は、これは捕まえざるを得ない、と思ったんです、警察的な意味で。しかし、丸腰で行けとは、当然、言えないですよ。非常に悩んだ時期があつて、結果から言うと、平和って何だろうという考え方の果てに、「平和に至る道というものはない、平和とはやり方のことなんだ」という言葉を得ました。それがあの時の苦悩の果てに得た唯一の言葉です。

高橋 他に何かありますか？

志茂田 どうしても聞いてもらいたいことがあるんです。僕には15歳の年の離れた兄がいました。一番上の長男で、姉2人がいて僕は末っ子です。兄は昭和19年の秋に大蔵省税務講習所の寮から、半年早い繰り上げ卒業で実家の官舎に戻って来ました。昭和18年から繰り上げ卒業が多くなりました。要するに、若い兵隊を取りづらくなったので、それだったら専門学校や大学にいないか、繰り上げ卒業で早く兵隊に取ろうと。そういうことで兄は戻って来て、3カ月ほど渋谷税務署に勤務しました。

でも、すぐに兵役がやってきて、官舎を離れる2週間ほど前から僕にカタカナを教えてくれたんです。廊下の結露しているガラス戸に、兄はカタカナを一字ずつ書いて、僕に同じものを書かせて教えてくれました。カタカナが終わって、ひらが

なも同じように教えてくれました。でも、その途中で兵隊に行く時が来て、兄は官舎を出て行きませんでした。

そしてまもなく、原隊が満州へ行くこととなり、兄も満州に渡りました。まだ日ソ不可侵条約をソ連が破ってくる何カ月も前でしたから、満州から軍事郵便がよく届きました。父母と2人の姉宛で、僕宛のは一通もなく、両親に文句を言ったら、兄に字を教わったのなら、お前が書けばいいと言われ、僕はカタカナで兄に手紙を書きました。その兄から初めて僕宛に手紙がきました。その一通が、僕宛の最後の手紙になりました。宛名にルビが振ってあり、それ以外は全部カタカナでした。ちょっと読んでみたいと思います。

「兄ちゃんは満州へ来る時、お酒を飲みすぎて酔って、ただおに敬礼をしましたね」

これはどういうことかと言うと、兄が入営する前に官舎の人たちが集まってくれたんです。男衆が中心で、賑やかに宴会をやっているの、4歳だった僕はその部屋をのぞきに行ったんですね。そしたら、お酌をしていた兄がパツと立って僕に敬礼をしたんです。そのことを書いています。「ただお」は僕の本名です。

「ただおは飛行機乗りになりなさい。満州に来たと言ったね。ただおが元気で勉強しているので、兄ちゃんはいうれしいです。敵の飛行機は毎日来ているでしょうね。ただおは早く兵隊さんになって」

手紙には小さなイラストで、片翼に2つずつ、つまり4発の発動機が描かれていますから、B29ということですね。

「早く兵隊さんになって、敵のB29を落とさなさい。お父さんお母さんの言うことをよく聞きなさい。」

では、また手紙をください。さようなら。

ただおのお兄ちゃんより」

そういう手紙です。軍事郵便は検閲されるので勇ましいことを書いてますけれども、まだ4、5歳の僕に、早く兵隊になってB29を落とせなんて、本心では思っていなかったと思います。

ソ連軍が満州へ侵攻した時に兄は新編成の師団にいたのですが、たちまち蹴散らされて、満州の広野を敗走し始めた。それも組織的な敗走ではなく、50人だったり100人だったり、もうてんでバラバラの敗走です。追いつかれれば戦うという、そういう戦いをしたのだと思います。でも、兄は戦死を確認されませんでした。というのは、兄がいた敗走部隊は全滅したと推定されていたのですが、戦死の状況がはっきりしたものではなかったの、行方不明扱いでした。

翌年、僕は小学校に入学しました。その頃、父と母から兄はシベリアにいるよ、という話をよく聞かされました。本当は一縷の希望だったと思います。その両親の話に、僕はいつも胸躍らせていました。もしもシベリアの住所が分かったら、兄

に手紙を書こうと思っただけですね。そして、その第一行は決まっていた。「兄ちゃん、ひらがなの続きは学校で覚えたよ」と。

昭和26年の2月か3月頃だったと思います。僕は3畳の兄の部屋に入って、本箱から本を取り出してページを広げるのを、ずっと日課にしていたんですね。難しかったから内容は読めませんでしたが、いつもそこから兄の匂いをかぎ取っていました。ある時、学校から帰ったら、母がその3畳間で正座していました。座り机の上の写真立てに兄の20歳の時の写真が入れてあり、その前に陰膳が供えられていました。母は毎日、陰膳を供えていたんですね。兄に帰って来てほしいと、本当に一縷の希望をずっとつないでいたんです。母は何か書類のようなものを持って泣いていました。

その夜、母がなぜ兄の部屋で泣いていたのかが分かりました。その日、兄の戦死公報が小金井役場から届けられたのです。たまたまその月に、兄と一緒に戦っていた3人の元日本兵がシベリアから引き揚げて来て、その人たちから、兄がどこで戦死したというはっきりした証言が得られたので、戦死公報が届いたのです。

とても悲しい思い出なんです、僕は中学生の頃から、何か辛い時や悲しい時があると、兄がカタカナひらがなを教えてくれた時のことをよく思い出していました。すると、背中を押されたように元気が出ます。僕にとってはとても素晴らしい思い出です。でも、素晴らしい思い出に、なぜ、この思い出ができたかに思いを至らせると、やはり不条理な戦争ということに突き当たります。

戦争はやはり、人類の課題として絶対になくさなければいけないものだということを、僕はとても痛感しております。僕はこれからも戦争小説を書くかどうか分かりません。でも、本当に小さな記憶ですけれども、戦争の記憶を一人でも多くの若い人たちに伝えて行きたいと思っています。

浅田 この催しは、日本ペンクラブの中の平和委員会が主体となっていて行っているのですが、他にもいろいろな委員会があって、「子どもの本」委員会では子どもたちに読書を勧めていく、夢を与えていく活動を行っています。この委員会が『10歳の質問箱 なやみちゃんと55人の大人たち』を作りました。子どもたちから寄せられたさまざまな質問に、日本ペンクラブの会員がそれぞれに答えるという形式の本になっています。私も質問に答えて原稿を書きました。

その質問というのは「外国が攻めて来たら自衛隊はちゃんと戦うのですか？ また、アメリカは日本を守ってくれるのですか？」という10歳の子どものからのものでした。私は、子どもにこれを考えさせる必要はないと思いますよ。ともかく子どもには、戦争は罪悪だということだけを教え続けて、でも、それは人類としていろいろな理由があつて、人類の悲願なんだけれども、なくならな

いんだ、とね。幼稚園で教育勅語を暗唱するのも読むのも、それは教育の自由なんだろうが、戦争は犯罪だということは必ず教え続けなければいけない。そういう意志力というのかな、大人たちの意志をはっきり持つことがとても大切なことだと思います。

ドリアン ここに持って来た本は古くから家にある本なんです、筑摩書房『現代文学大系』昭和39年版の『石川達三集』で、この中に『生きてゐる兵隊』という小説が収録されています。これは南京陥落後に、石川達三さんが累々たる死体乗り越えて入って行って、まさに現場を見た後に書いた小説です。この小説そのものは記録ではない、と石川さんは書いていますが、久しぶりに読み返してみました。今、南京虐殺はなかったとか、そういう論調の人も増えていく中で、この本を一冊読むということは骨が折れる作業ですけども、とても大事なことだと思うんですね。

ところが今や、どこの書店に行っても、売れる本はまあまあ長く置いてくれますけれども、私のような者が書いたような本だと2週間でも片づけてしまうこともある。戦前の方が書いた本をどうやって手に入れるのか。石川さんであれば中央公論新社が出していますが、それでもやはり今の若い人たちがこの『生きてゐる兵隊』を読む機会があるのかと言えば、ほとんどないと思います。では、どうやって若い人たちに読んでもらうのか、



会場風景

というのが一つの課題になってきている、と僕は思います。

浅田 今、いろいろな法律ができつつあるのですが、自衛隊を外国に出せる法律にしろ、共謀罪にしろ、必要性は分かるんですよ。今の事情から言ったらそれが必要だろうな、と事情は分かるんですけど、今でも、今の立法に携わった人は責任が持てると思います。われわれが危惧するようなことは絶対にしません、と言っているのなら、しないと思いますよ。ただ、人間は死ぬんですが、法律は死なないんです。これから10年か20年後、その法律がどのように一人歩きするか、どのように悪

用されるか、というのを誰も思いつかないんですね。だから、そういう将来に危険性のある法律というのはバツなんです。それは未来に対して責任を持つということであって、このところの立法というものを見てみると、今のことしか、今の私たちの生活ということしか考えていない。子どもや孫の時代に、その法律がどう使われていくのかというところまで思い至ってはいない、という気がします。法律というものはそういうものだと思います。

高橋 本日のテーマ「戦争と文学」で、パネラーの皆さんの記憶に残る文学作品を挙げていただけますか？

志茂田 じっくりと読みながら、戦争っていうのは決してやってはいけないという思いを強く残してくれた作品は、大岡昇平さんの『レイテ戦記』です。今でもたまにところどころ読み返しますけれども、これに尽きるなあという思いは変わりません。

ドリアン 僕はいくつかあるのですが、昨年、日本ペンクラブの訪中団で中国に行ってきた北京と上海の中国ペンクラブの皆さんと会ってきました。南京を訪れた時に、南京虐殺記念館に入りました。そこに展示されている写真、例えば人の影の姿がおかしいとか、あるいはこれは日本軍の南京侵攻の写真ではなくて、国民党と共産党の長征の写真ではないかと、いろいろと疑念を持

たれている方も日本にはたくさんいらっしゃるようです。でも、石川達三さんの『生きてゐる兵隊』を改めて読めば、その歩兵戦のすさまじさ、日本軍が入って行つてからの地獄がずっと書かれているわけです。まだ読んだことがないという方がおられましたら、是非ともこの小説を読んでいただきたいなと思います。

浅田 戦争小説を挙げると切りがないのですが、私の印象にすぐく残っているのは、中山義秀さんの短篇小説『テニアン^{センニアン}の末日』です。テニアン島は今ほリゾート地ですが、玉砕の島でありました。日本軍が玉砕する時に、洞窟の中で淡々と診察を続けて現実をずっと凝視し続ける二人の若い軍医の話です。

これは僕らの世代には必読書だったと思うのですが、小説というのはキャパシティがあるから、新しいものがどんどん出てくると、やはり古いものは消えていってしまうんですね。だから、探しても読んでいただきたい。現在あるのかどうかを探すのも大変だと思いますが、先ほど取り上げた文学全集『戦争×文学』シリーズの中には収録されています。今の作家の本は書店で買って読めばいいわけですから、学校や公立の図書館にそうした新刊をたくさん並べる必要はなく、それは真のサービスではない、と思うんですよ。手に入りにくい良書を探して選別して、それを図書館にたくさん入れてほしい、と思います。



高橋千詔破氏

高橋 戦争文学はだんだんと先細りになって、われわれの記憶から薄らいで行くのではないかという危惧があるのですが、そのために手に入りにくい本が図書館で読めるという必要があるわけですね。まだ少し時間がありますので、気になったことや言い忘れたことなどがあれば……。

志茂田 平和があつて、生命があつて、悔いのない人生が築けるのかな、と思います。皆さん、そのように生きませんか。やはり、戦争はもう見たくありません。

浅田 私の父は大正13年の生まれでした。戦争で一番生命を落としたというか、主戦力となつて戦つたのはこの大正世代ですね。父は変な人だつたんですけれども、昭和26年生まれの僕とはすぐく仲が悪かつた。あまりにも気が合わないから、考

えていることが分からなくて、すごく嫌いだった。おそらくは父もそうだったと思いますけれども。大正と昭和、こんな世代ギャップの親子つて、世の中にいないんじゃないかと思えますよ。大正13年生まれの人つて、関東大震災の焼け野原で生まれたんですね。それから物心ついた時に金融恐慌でひどい不景気になって、戦争に取られるのが昭和19年か20年です。戦争から帰つて来ると、東京はまた焼け野原だったわけですね。

そういう世代の父と比べて、僕の世代というのは、ものすごく能天気です。高度成長の右肩上がりと一緒に成長していったのですから。おそらく若い方たちのほうがもっとものを考えていると思いますよ。僕らの世代は、多分、考えずに育つてます。普通にやつていけば物が増えていく、電化製品が一つずつ家に入ってくるのを全部覚えていくという時代でしたからね。これでは父と子は互いに理解できません。私は自分で戦争小説を書いて、昭和史にまつわる小説を書いて、これはよかったなと思つたのは、父や母のことがよく分かつたことですね。

ちよつと昔の時代の小説を読むと、世代の苦労がよく分かります。これは小説を読む一つの副産物なんですね。やはり、読書や文学はとても大切なことであつて、これに代わる教養の採り方はない、というのがお分かりいただけると思います。ドリアン 何を書くか、何を伝えていくかという

ところで、もうちよつとの頑張りが必要のような気がしています。例えば、吉永小百合さんが原爆詩を読んだりすることに対して、けしからんという声なんかネット上にたくさんあがってます。このネットというものが出てきて、とにかく何をしても叩かれる時代になつてしまった。

日本の過去を反省するほうが日本人にとつて潔い、と僕は思っているのですが、日本の過去について、正直に影を見る、暗闇を見ろという行為がだんだんやりにくくなつてきている。人間の心情として、やはり叩かれたくない、怖い人たちに脅されたくない、という思いがあると思うのですけれども、私たちは何かを綴る時とか伝えていく時は、何かちよつとびびっているところを一步踏み出すべきだと思います。それを自分から始めるべきなんですけれども、その一步の勇気を皆が持てた時に、また時代は変わっていくのではないかな、と思っています。

高橋 昭和30年代に入ってから、日本は急激に今の形になつていつて、戦後を追わなくなつてしまひ、同時に戦争そのものも記憶から薄らいでいきました。しかし、これは私たちが語り続けていかなければいけないし、文学作品の中でそういったものを、私たち文筆に携わる者たちが残していかなければいけない、と本日のパネルディスカッションを通して痛感した次第です。最後に、どなたか、一言がありましたら……。



森ミドリ氏

志茂田 おいしい料理と美酒と素敵な夫あるいは妻、そして子どもたちがいれば、他はいりません。
高橋 それではこれで、パネルディスカッションを終わらせていただきます。ありがとうございます（拍手）

パネルディスカッションが終わって、総合司会の森ミドリ理事がドリアン助川さんの9・11テロ事件で犠牲になった人たちがその後継に受け継いでいったであろう生命という話に関して、「ちょっと私事で申し訳ないのですが」と、自分の両親のことを語った。両親はどちらも二度目の結婚、つまり再婚同士で、母の最初の夫は軍人で戦死して、母の再婚で森さんが生まれたという。「戦争がなければ、母は再婚せずに私も生まれなかった。な

んとも不思議な複雑な思い」を語り、それぞれに持っているかけがえのない生命を大切にできるよう、「戦争は本当に嫌です」と結んだ。

最後に梓澤和幸平和委員長が、今回の多摩市での「平和の日」の集い開催のお礼を述べ、次回は来年5月20日に沖縄県宜野湾市で開催されることを発表。沖縄の人たちと文学を、そして平和を語り合う意義について述べ、共に今の時代を生きて友情を結ぶ集いには是非ともご参加をと呼びかけて、多摩市での「平和の日」の集いは21時に終焉となった。小ホールのロビーでは、丸善センター支店の協力を得て出演者サイン本販売コーナーが設置されて、閉会後もにぎわっていた。

今回から、平和委員会のメンバーを中心とした運営となり、企画事業委員会のメンバーも駆けつけ、新しい形での「平和の日」の集いにふさわしい有意義な一晚となった。



梓澤和幸氏

国際ペンの動き（17年2月・3月）

（国際ペンホームページより）

【ウズベキスタン】国際ペンは、作家としては世界で一番長い18年間投獄されていた、ムハマッド・ベクジャノフ氏が2月22日釈放されたことを歓迎する。

【トルコ】ドイツの新聞「デイ・ヴェルト」紙の記者でドイツとトルコの国籍を持つジャーナリストのデニス・ユチエル氏は2月14日に拘束され、同27日正式に起訴された。国際ペン、ドイツ・ペンは同氏の釈放を強く求めた。

【メキシコ】3月6日、メキシコ・ペンの会員を含むメキシコの作家・ジャーナリストは、米国のトランプ政権のメディア攻撃に憂慮の念を表明し、米国のジャーナリストと連帯するという声明を出した。同声明にはジェニファー・クレメント国際ペン会長も署名した。

【バーレーン】2011年6月より政府批判活動により終身刑に服しているバーレーンのプロガーで著名な学者、アヴドウライ・アル・シingas博士は獄中で脱水症状を起こし、軍の病院に3月初旬移送された。持病を持つ同氏の獄中での健康状態が心配され、国際ペンはバーレーン政府に対し医療サービスを提供するよう緊急に求めた。